

動物の社会性を守るために
—動物園での取り組みと課題—

福守 朗（鹿児島市平川動物公園）

母親の育児拒否などにより人工哺育で育った類人猿は、社会行動に問題が生じることが多い。少しでもそれを軽減させるには、同年齢集団で育てる方法がある。1991年に高知県立のいち動物公園では人工哺育で育った当時1歳のチンパンジーを集めて群飼育を開始した。さらに2008年には計6頭の個体交換を行い群の再編成を行った。その結果、繁殖に成功し人工哺育個体も社会交渉の機会が増加した。新たな群形成の試みが鹿児島市平川動物公園でも行われた。かつてはチンパンジーを単性・単独飼育していたが、新規個体を導入し群形成を進めた。現在は1歳から35歳まで6頭の複雄複雌群が形成されている。他の動物園においても類人猿飼育において新たな取り組みが進められてきた。人工哺育で育った個体を母親あるいは代理母に戻す試みである。国内では過去10年間で少なくともチンパンジー3例、ゴリラ2例、オランウータン1例で成功している。欧米の飼育マニュアルには代理母への導入方法が紹介されており、代理母がリストアップされている。今後は国内でも動物園が互いに協力して代理母候補個体の情報共有を行うこと、人工哺育個体の社会復帰を支援する体制を整えることが課題である。